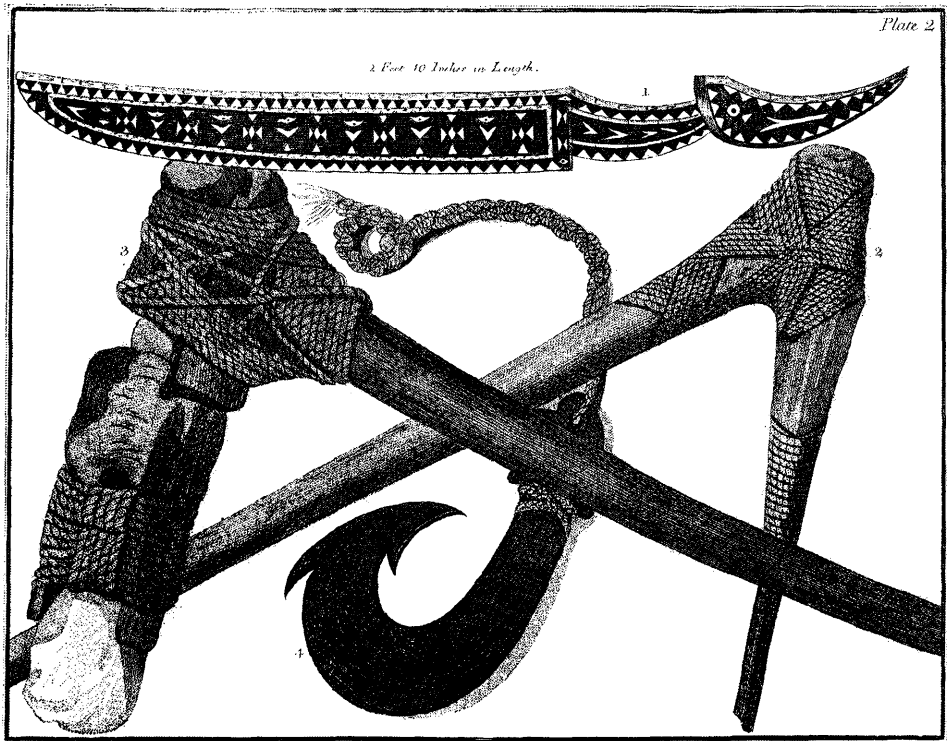


文化史の諸相：チャモロ語・パラオ語の重層的特徴

著者	崎山 理
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	006
ページ	231-240
発行年	1989-02-20
URL	http://doi.org/10.15021/00003735

第 3 章

文 化 史 の 諸 相



パラオの短剣, 斧, 釣針

(George Keate, *An Account of the Pelew Islands*, 1788 より)

チャモロ語・パラオ語の重層的特徴

崎 山 理*

- | | |
|--------------------|-------------|
| I. 研究前史 | 1. 語頭の対応 |
| II. チャモロ語・パラオ語の特異性 | 2. 語中の対応 |
| III. 音韻対応の例 | IV. 基層言語の影響 |

I. 研究前史

ミクロネシア西カロリン群島のパラオ諸島で話されるパラオ語とマリアナ諸島、グアム島で話されるチャモロ語とは、言語の系統分類的にはオーストロネシア語族のインドネシア語派（ヘスペロネシア語派）に含められる [BENDER 1971]。

この基準の嚆矢は、1908年、ミクロネシア諸言語における代名詞の用法と範疇詞の存在という視点から比較を行なった A. タールハイマー [Thalheimer 1908] にまでさかのぼることができるであろう。彼は、被所有物につく一人称単数所有接尾辞（「私の」）のチャモロ語 *-ho*、パラオ語 *-k* が他の諸言語の *-i* と異なるのみならず、その他の言語には範疇詞が存在し被所有物を表現するうえでも区別が行なわれることを示した。ただしヤップ語、コシャエ語にも *-k* が現われるが、*-k* がついて現われる範疇詞は、それぞれ、*ru-k*、*lu-k* のように音的にも類似する。したがってヤップ語とコシャエ語のみは、他の諸言語と対立する同じ語群を形成すると考えた。範疇詞が存在する現象をメラネシア語派の特徴とみなしたのはタールハイマーの功績であるが、パラオ語にも存在する範疇詞に彼は気づかなかったばかりか、チャモロ語の場合についても、彼はそれを過小に評価している。

チャモロ語はミクロネシアの言語のなかでもっとも早くヨーロッパ人が接触した言語である。1668年、はじめて簡単なチャモロ語文法付きの公教要理を著わしたジェスイット派の神父、D. L. de サンヴィトレスは、マリアナ諸島に渡来するまえに、滞在していたフィリピンで習得したタガログ語と比較して、マリアナ語 (Lingua Mariana) すなわちチャモロ語は語彙的のみならず、文法的にもタガログ語ときわめて類似する

* 国立民族学博物館第5研究部

ことを指摘している [BURRUS 1954]。ちなみに、1521年、マゼランによって命名された泥棒諸島 (Ladrones) という不名誉な島の名称を、当時のスペインのカルロス二世の母でかつ摂政であったマリア・アンナの名前をとってマリアナ諸島と改称したのはサンヴィトレスである。彼はマリアナ語の記述においても、しばしばタガログ語の例を引用する。とくに両言語において動詞の能動形、受動形にもちいられる、それぞれ、接中辞 *-um-* と *-in-* の比較は、まだ接中辞という言語学的術語では説明されていないものの (いわく「語根 (radix) の最初の子音のあとに置かれる小辞 (particula)」)、接中辞がインドネシア語派に属する言語にのみ共通してみとめられる重要な文法的要素であることに、彼はすでに気づいていたのである。

このような未知の言語にたいする記述の態度が、当時としてはいかに科学的であったかは、1783年、パラオ諸島で座礁したアンテロープ号がイギリスに連れかえったパラオ人から採集したパラオ語彙の語源的解釈のために、G. キート [KEATE 1788] が一貫してヘブライ語にその語源をもとめようとした態度からもうかがえる。18世紀はまだ言語起源一元説が正論の時代であったからである。たとえば、その語彙集のなかで *mathee* 「殺された」、*catheph* 「短い」、*naak* 「私」、*kow* 「君」などをヘブライ語起源と説明している。しかし現在のオーストロネシア語比較言語学では、それぞれ、現代パラオ語の表記法 [McMANUS and JOSEPHS 1977] による *mad*, *kedeb*, *ngak*, *kau* は、原オーストロネシア語の **matay*, **(ng)aku*, **kaw* に由来することがあきらかで、ヘブライ語とはなんの関係もない。また *kedeb* は語源が不明である。

II. チャモロ語・パラオ語の特異性

チャモロ語とパラオ語とがインドネシア語派 (ヘスペロネシア語派) に属するという説にたいし、I. ダイアン [DYEN 1965] の語彙統計学的分類では、この両言語にヘオネシア語派 (Heonesian Linkage いわゆるオセアニア諸語に相当する)、ヘスペロネシア語派、台湾語派、モルッカ語派と並立する位置を与える。この分類法自体は、オーストロネシア語族における両言語の語彙的な相互隔絶性をものがたるものでしかない。しかし両言語が周辺の言語との関係においてみせる特異な様相は、単純な語派的分類で説明しつくせない、多層的な要因を含むことに起因するといえるのである。

ミクロネシアの諸言語が、その波状的に行なわれた民族分布によって多層的に形成されているという指摘を、筆者はこれまでも行なってきた [崎山 1986, SAKIYAMA 1987a, 1987b]。また R. プラストによってマライタ・ミクロネシア共通祖語という

レベルも提唱されている [BLUST 1984]。

本稿では、チャモロ語の語頭に現われる音素 /gw/ についてパラオ語との比較を試み、あわせてそのオーストロネシア語史的な存在理由を考察しようとする。

再構成された原オーストロネシア語 [DEMPWOLFF 1938] からみると、チャモロ語には語史的にはいろいろの解釈を生じさせる唇軟口蓋音 (labiovelar) の [gw] が現われる。たとえば、原オーストロネシア語 **apuy* 「火」は *guafi*, **ini* 「ここ」は *guini* のように現代語で表記される [TOPPING et al. 1975]。これらはマレー語 *api*, *ini*, タガログ語の *apoy*, (*d*)*ini* などと対応することからも、チャモロ語の *gw* は異例な音であることがわかる。

この音についての解釈は、すでにサンヴィトレスにみえる。

「*u* はしばしば引き伸ばされて *gu* となるが、本稿ではそれぞれ *ū* と記す」 (U profertur saepius ut syllaba per se non discrepans fere a GU, et hoc indicator item hac nota *ū*.)

この記述において *gw* を *u* の異音であるかのようにみなしているのは、不正確の域をでない。またその表記法も *ūaho* 「私」、*ūafi* 「火」、*iūaro* 「八」と書き、*guiya* 「彼」、*guini* 「ここ」、*gunum* 「六」と書くなど首尾一貫しない点がある。これはなにか音声上のちがいを反映させようとしたためであろうか。現代語ではそれぞれ、*guahu*, *guafi*, *gualo* (古語, 月日とともに), *guiya*, *guini*, *gunum* (古語, 月日とともに) と書かれる。

この *gw* をオーストロネシア語族の枠内で他の言語と比較する試みは、J. カッツ [KATS 1917: 14-15, 18-19] にはじまる。引用する例が少ないにもかかわらず、*gw* が他の言語の *w*, *h*, ゼロまたは *b* と対応することに気づいている。しかし *gw* にたいし *g* が現われる条件を無視したり、*gi* 「(場所の前置詞)」と古ジャワ語 *ri*, マレー語の *di* などを直接、比較するなど方法論的に問題もある。

その後、H. コステノブル [COSTENOBLE 1940: 91-92] は、原オーストロネシア語期 (彼は第一層となづける) および原ヘスペロネシア語期 (第二層) に祖語音の **w* あるいは **ʷ* (**h*, ゼロ) が *gw* に、また後続する母音 *u* があるとき (*gw* > *gu* >) *g* に変化するという通則を示した。また泉井久之助は、語頭の母音の円唇化とともに声門の閉塞 [ʔ] があって、そこから *gw* が発生したとのべた [泉井 1949: 7]。

ダイアンは、チャモロ語の *gw* のみならず東部インドネシアのセラム島西部のアレオネ語、ソロモン諸島のラウ語にも *kw-* が現われることから (たとえば対応例は少ないがアレオネ語の語頭で *kwalu* 「八」、語中で *sikwa* 「九」のような例がある)、原

オーストロネシア語の音韻体系において唇軟口蓋音が存在する可能性を示唆した [DYEN 1962]。しかし O. C. ダールは、唇軟口蓋音を祖語にあえてたてる必要をみとめず、*gw* は非音節的な (nonsyllabic) **u/*w* の規則的変化として説明できると考える [DAHL 1977: 46-50]。しかしこれらの説のいずれも、同じ音韻的環境にありながら、チャモロ語における *gw* を含まない形が何故存在するかについては、考慮していないことになる。

チャモロ語の語頭、語中に現われる *gw, g* およびゼロ (∅) は、パラオ語とつぎに示すような音韻対応関係をもつ。

Ⅲ. 音韻対応の例

1. 語頭の対応

チャモロ語の語頭音がゼロ（つまり母音開始）にたいし、パラオ語では原則的に表記法では *ch* [ʔ] で対応する。左の原オーストロネシア語形は O. デムプウォルフによる再構形をダイアン式にローマ字化したもの。チャモロ語の ' は [ʔ] を意味する。なおパラオ語表記法におけるアクセント記号は省略した。

	チャモロ語	パラオ語
* <i>abu</i> 「灰」	<i>apu</i>	<i>chab</i>
* <i>anitu</i> 「霊」	<i>aniti</i>	<i>chelid</i>
* <i>apuR</i> 「石灰」	<i>afok</i>	<i>chau</i>
* <i>asu</i> 「煙」	<i>asu</i>	<i>chat</i>
* <i>atep</i> 「屋根」	<i>atof</i>	<i>chado</i>
* <i>uDang</i> 「甲殻類」	<i>uhang</i>	<i>cherchur</i> ⁽¹⁾
* <i>ulu</i> 「頭」	<i>ulu</i>	<i>chui</i> 「髪」 ⁽²⁾
* <i>ulej</i> 「虫」	<i>ulo'</i>	<i>chul-ad</i> 「条虫」 ⁽³⁾
* <i>uzan</i> 「雨」	<i>ucan</i>	<i>chull</i>

以上のパラオ語形のうち、(1)は重複形の **uDang-uDang* に由来する。

(2)は **gulu* 「髪」にさかのぼる、チャモロ語 *hulo'* 「上」と対応する同族語である可能性もある。ただしその場合、*hulo'* の ' は二次的に発生したと解釈しなければならない。

(3)の *-ad* は意味不明である。しかし体内にとりついた虫にたいし、先天的 (inalienable) 関係を示す人称接尾辞 *-ad* 「われわれ (包括形) の」を直接つけてつくられ

た派生形であることも考えられる。

またデンプウォルフの試みていない形からも、

* <i>adoq</i> 「海草」	<i>ado'</i>	<i>char</i>
* <i>alu</i> 「カマス」	<i>alu</i>	<i>chai</i>
* <i>emang</i> 「ヤドカリ」	<i>umang</i>	<i>chemang</i>

のような例がえられる。一方で、チャモロ語の語頭音が *gw*, *g* にたいし、パラオ語では *ng* で対応する。このパラオ語の語頭に出現する *ng* も、後述するように、オーストロネシア語史において問題の多い要素である。

* <i>aku</i> 「私」	<i>guahu</i>	<i>ngak</i>
* <i>apuy</i> 「火」	<i>guafi</i>	<i>ngau</i>
* <i>ikan</i> 「魚」	<i>guihan</i>	<i>ngikel</i>
* <i>ini</i> 「ここ」	<i>guini</i>	<i>ngil-ei</i> ⁽⁴⁾
* <i>inum</i> 「飲む」	<i>gimen</i> ⁽⁵⁾	<i>ngilim</i>
* <i>iya</i> 「彼」	<i>guiya</i>	<i>ngii</i>
* <i>uRat</i> 「筋」	<i>gugat</i>	<i>ngurd</i>
* <i>vaDa</i> 「在る」 ⁽⁶⁾	<i>guaha</i>	<i>ngar</i>

そのほかデンプウォルフにない形では、

* <i>eRu</i> 「モクマオウ」	<i>gagu</i>	<i>ngas</i>
----------------------	-------------	-------------

がある。

この例のうちで、(4)は話し手に近く聞き手から遠い人・動物をさして「この」を意味する形容詞につく接尾辞 *-ei* との派生形である。

(5)のチャモロ語形は **guinem* を経たことが推定されるが、現在ではすたれた *ginem* が、今世紀始めにはまだ残っていたことがわかる [CALLISTUS 1910: 123]。

(6)からは **uaDa* を経由して各語形にいたったのである。

うへの例から両言語のあいだに明瞭に音韻対応関係をみとめることができるがつぎのような例外もある。

* <i>ijung</i> 「鼻」	<i>gui'eng</i>	<i>iis</i>
* <i>enem</i> 「六」	<i>gunum</i>	<i>el-olem</i> ⁽⁷⁾
* <i>Rumah</i> 「家」 ⁽⁸⁾	<i>guma'</i>	<i>um-ad</i> 「軒」
* <i>valu</i> 「八」	<i>gualo</i>	<i>e-ai</i> ⁽⁷⁾

これらの例ではチャモロ語 *gw* にたいし、パラオ語ではゼロになる。ただし(7)はつ

ぎの語中でとりあげる「九」とともに数詞に関係し、これらの例ではいずれも時間の単位を表わす接頭辞 *e-* を語頭にともなっている。ただし *el-olem* の *el-* には侵入音 (intrusive) の *l* が含まれる。したがって *ng-* が語頭に現出するまえに、数詞にはこのような派生形がすでに成立していたと考えられる。原オーストロネシア語の指示詞 *i* もチャモロ語 *-i* 「受益者重点文のマーカ―」、パラオ語 *-ii* 「三人称単数目的語接尾辞」のように接尾辞ではゼロ同士の対応となる。

(8)からは **umah* を経たことがわかるが、この推定形の根拠はミクロネシアの他の諸言語から、たとえばトラック語 *iimw-*、マーシャル語 *emw-*、アドミラルティ諸島のマヌス語 *um* のように実証できる。ただしトラック語、マーシャル語の語頭母音 *i, e* は、後接される人称接尾辞の逆行同化によって **u* から変化したものと考えられる。

つぎの例はチャモロ語 *g* にたいするパラオ語 *ch* のまれな例であるが、その対応からは祖語形としてデンプウォルフの **qunap* よりも **unap* が期待されるのみならず、チャモロ語の語中の *'* はパラオ語と対応しない。同じことはうえの **ijung* に由来する *gui'eng* の *'* についてもいえる。いずれにせよ不規則形が不純形であることは、逆に規則性の存在を裏づけているともいえる。

**qunap* 「鱗」 *go'naf* *cholo*

またつぎの例は、コステノブルの掲げる例のなかにもみ見出されるが [COSTENOBLE 1940: 39], チャモロ語が例外となる理由として、フィリピン言語からの借用語 (たとえばタガログ語 *anay*) ではないかとの疑念をいだかせる。

**anay* 「シロアリ」 *anay* *ngal*

2. 語中の対応

チャモロ語 *gw* は語中にも現われるが、パラオ語のゼロと対応し、うえの *'* と同様にチャモロ語では二次的に発生した可能性がある。ただしその条件は不明である。

<i>*kaw</i> 「君」	<i>hagu</i> ⁽⁹⁾	<i>kau</i>
<i>*Duwa</i> 「二」	<i>hugua</i>	<i>eru-ng</i>
<i>*siva</i> 「九」	<i>sigua</i>	<i>e-tiu</i>
<i>*dahun</i> 「葉」	<i>hagon</i>	<i>llei</i> ⁽¹⁰⁾
<i>*buhaq</i> 「実」	<i>pugua'</i> 「ビンロウジ」	<i>buuch</i> 「ビンロウジ」

チャモロ語⁽⁹⁾は強調形, *hao* という形もある。パラオ語⁽¹⁰⁾は原オーストロネシア語の派生形 **dahun-an* 「葉の類」に由来する。

語頭での音韻対応をもう一度整理すると、チャモロ語とパラオ語とのあいだにはつぎのような関係が存在する。

チャモロ語	パラオ語
∅-	ch-
gw-	ng-

例からあきらかなように、*gw* はあらゆる母音のまえに出現することができる。

パラオ語の語頭の *ng* については、これまでパラオ語史のなかでの内的問題としてのみとりあつかわれ、比較言語学的には論じられてこなかった。

ただし K. ベツォルドは、パラオ語の語頭の *ng* は古ジャワ語やタガログ語にみられる冠詞 *ang* が、つぎのように語頭に残ったものとみなした [PÄTZOLD 1968: 21-22]。

タガログ語: *ang ugat* 「動脈」

パラオ語: *a ng-urd* 「筋」

なお、現在のパラオ語で *a* は冠詞 (または句のマーカ) として機能している。しかし、この考えでは、何故、パラオ語に語頭の *ch* の例があるのかを説明できない。

IV. 基層言語の影響

チャモロ語 *gw*, パラオ語 *ng* は、ミクロネシアの西側にいたったチャモロ語とパラオ語が共通にこうむった文法的影響を同時に反映するものといわなければならない。この場合、そのような影響を与えた言語として、すでにミクロネシアに先住していた民族語を基層言語として想定せざるをえない。そのような前オーストロネシア要素 (pre-AN element) をもった言語として常識的に考えられるのは、現在のパプア諸語の前身となった言語である。しかしその言語をどれと特定することは、現在ではもはや困難である。いずれにせよその言語では、自然界にたいしなんらかの範疇化の形式をもっており、チャモロ語とパラオ語に、その本来の意味づけが忘れさられたまま、二つの類としてワクのみが残されたと解釈される。ただし音的にみれば、*gw* と *ng* とから再構成しうる祖語音として、ダールが試みたようにチャモロ語からえられた **u-* は、音声学的にも妥当なものといえる。軟口蓋母音 **u-* は鼻音化されることにより、軟口蓋鼻音の *ng* [ŋ] にも容易に変わりうるからである。ただしその機能につい

では、二つの類への分類基準とともにいまだ不明瞭の点がおおい。なお現代パラオ語では *ng* は三人称単数の非強調形代名詞となる。**u-* になんらかの弁別的機能があったことは考えられる。

前オーストロネシア語的とみられる範疇化現象 [CAPELL 1962: 385] は、インドネシア語派に分類されるチャモロ語、パラオ語に表現形式として現在もまだ濃厚に残存する。

現代チャモロ語には範疇詞として *na'*-「食べ物」、*ga'*-「人間以外の動物」、*iyó-*「無生物」の三つあり、名詞からは *gimen*「飲み物」が範疇詞として転用される [TOPPING 1973: 164-165]。それぞれが所有接尾辞を直接したがえて自然界を表現しわけると、たとえば、一人称単数形で示すと、

<i>na'-hu guihan</i>	「私の（食べるための）魚」
<i>ga'-hu guihan</i>	「私の（飼っている）魚」
<i>gimen-hu kafe</i>	「私の飲むコーヒー」
<i>iyó-ku kareta</i>	「私の車」

のようになる。ただし身体・血縁にたいしては、メラネシア語派の言語が一般的にそうであるように、範疇詞はなく所有接尾辞が直接、名詞につけられる。

このような範疇化はパラオ語では、

<i>odim-ek el ngikel</i>	「私の食べるための魚」
<i>cherm-ek el ngikel</i>	「私の飼っている魚」
<i>imel-ek el kóhi</i>	「私の飲むコーヒー」
<i>sidosia er ngak</i>	「私の車」

のように区別されるが、パラオ語には専用の範疇詞の発達はみられない。*odoim*～*odim-*「おかず」、*charm*～*cherm-*「動物」、*ilumel*～*imel-*「飲み物」のように名詞が範疇詞として転用されている。このほかにも *kall*～*kel-*「主食」（例：*kel-ek el udong*「私のうどん」）、*ongraol*～*ongul-*「でん粉質の食べ物」（例：*ongul-ek el kukau*「私のタロイモ」）のように食物関係に名詞の範疇詞的用法が発達している。

このような表現は同格的構文と説明されることもある [JOSEPHS 1975: 73-74, 457-458] が、一般的言語現象とするまえに、特定の地域のインドネシア語派にだけ何故このような表現が現われるのかが、説明されなければならない。最後の例の *er ngak* (*er* は多機能の前置詞、*ngak* は強調形の独立的代名詞) は、身体・血縁 (*inali-
enable*) を現わす名詞に直接、接尾される形式と基本的に対立する形式をつくり、上

記の制限的な範疇をのぞく後天的に獲得されたあらゆるもの (alienable) につく。この表現形式は東部インドネシアのフローレス島のマンガライ語にも見出され、先天的なもの (例: *ase-g* 「私の兄弟」) と後天的なもの (例: *rona d-aku* 「私の夫」) は、後者が所有のマーカ-の *d-* を介することによって対立する [CAPELL 1976: 538]。語源的に *d-* は、パラオ語の *er* と同じく、原オーストロネシア語の場所を現わす前置詞 **di* に由来する。筆者は確認していないが、スラウェシ島北部のゴロンタロ語でも、チャモロ語にみられたような動物ともとの、所有代名詞による範疇化が行なわれる [THALHEIMER 1908: 88]。

東部インドネシアにおけるパプア語的基層要素は、現在もティモール島、パンタル島、アロル島にはパプア系の言語が存在することからしても、とくに異とするにあたらない。

パラオ語に残存する、きわめて非オーストロネシア語的な、したがってパプア語的表現の残滓として無視できないのは、三人称主語代名詞における人間性/非人間性 (動物、ものを含む) の区別である。

ng-: 単数人間・非人間 (彼, 彼女, それ)

複数非人間 (それら)

te-: 複数人間 (彼等, 彼女等)

このような識別法において、家畜として飼われている複数のイヌ、ブタなどは、*te-* で表現されることがある [JOSEPHS 1975: 496]。パラオ語ではまた、三人称目的語代名詞にも人間性/非人間性の区別が現われる。

-ii: 単数人間・非人間

-terir: 複数人間

-∅: 複数非人間

目的語では複数非人間がゼロ標識で現わされる点が注目される。

パプア諸語では一般に三人称代名詞に男性/女性の区別をするほか、生物/無生物の区別をする言語も多い。後者はニューギニア高地言語系のサルト=ユイ語、マダン=アデルベルト山脈言語亜門のシロイ語などにみられる。

文 献

BENDER, W. B.

1971 Micronesian Languages. In T. A. Sebeok (ed.), *Current Trends in Linguistics* 8, The Hague/Paris: Mouton, pp. 426-465.

- BLUST, R.
1984 Malaita-Micronesian: An Eastern Oceanic Subgroup? *Journal of the Polynesian Society* 93(2): 99-140.
- BURRUS, E. J. S. J.
1954 Sanvitores' Grammar and Catechism in the Mariana (or Chamorro) Language (1668). *Anthropos* 49: 934-960.
- CALLISTUS, P. O. von
1910 *Chamorro-Wörterbuch*. Hongkong: Typis Societatis Missionum Ad Exteros.
- CAPELL, A.
1962 Oceanic Linguistics Today. *Current Anthropology* 3(4): 371-428.
1976 Austronesian and Papuan "Mixed" Languages: General Remarks. In S. A. Wurm (ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study* 2, Pacific Linguistics C-39, pp. 527-579.
- COSTENOBLE, H.
1940 *Die Chamoro Sprache*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- DAHL, O. C.
1977 *Proto-Austronesian*. Lund: Studentlitteratur.
- DEMPWOLFF, O.
1938 *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes* 3. Berlin: Dietrich Reimer.
- DYEN, I.
1962 Some New Proto-Malayopolynesian Initial Phonemes. *Journal of the American Oriental Society* 82: 214-215.
1965 *A Lexicostatistical Classification of the Austronesian Languages*. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- 泉井久之助
1949 『比較言語学研究』創元社。
- JOSEPHS, L. S.
1975 *Palauan Reference Grammar*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- KATS, J.
1917 *Het Tjamoto van Guam en Saipan vergeleken met eenige verwante talen*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- KEATE, G.
1788 *An Account of the Pelew Islands*. London: Wilson and Nichol.
- McMANUS, FR. E. G. S. J. and L. S. JOSEPHS
1977 *Palauan-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- PÄTZOLD, K.
1968 *Die Palau-Sprache und ihre Stellung zu anderen indonesischen Sprachen*. Berlin: Dietrich Reimer.
- 崎山 理 (SAKIYAMA, O.)
1986 「オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触——とくに語順変化について」『国立民族学博物館研究報告』11(2): 355-382。
1987a East-West Cultural Exchanges in the Western Carolines. In I. Ushijima and K. Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia*. Senri Ethnological Studies 21, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 43-51.
1987b Linguistic Evidences of New Guinea-Micronesia Connection. *Man and Culture in Oceania* 3: 299-303.
- THALHEIMER, A.
1908 *Beitrag zur Kenntnis der Pronomina personalia und possessiva der Sprachen Mikronesiens*. Stuttgart: J. B. Metzlersche Buchhandlung.
- TOPPING, D. M.
1973 *Chamorro Reference Grammar*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- TOPPING, D. M. et al.
1975 *Chamorro-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.